

## 第五章 禪思想の中國の形態

增永 靈鳳

## 第六章 公案の歴史的発展型態における眞理性の問題

古田 紹欽

## 第七章 天台止觀の成立とその展開

關口 眞大

## 第八章 法華圓教教理論

故 福田 堯顯

## 第九章 法界緣起の歴史的形

坂本 幸男

## 第四篇 日本佛教の至境及び眞理觀

## 第一章 日本佛教の倫理性

遊龜 教授

## 第二章 日本佛教における戒律觀

西本 龍山

## 第三章 一乘思想の日本的展開

花山 信勝

## 第四章 密教の日本的形態

金山 穆韶

## 第五章 台密思想史上の慈覺大師

清永谷恭順

## 第六章 叡山における淨土教の形態

佐藤 哲英

## 第七章 法然の淨土教と佛教眞理

椎尾 辨匡

## 第八章 親鸞の他力信心

金子 大榮

## 第九章 自然法爾の開顯

梅原 眞隆

## 第十章 日蓮聖人の宗教に於ける

「事」の本質的構造 望月 歡厚

## 第十一章 正法眼藏の眞理觀

岡田 宜法

## 第十二章 道元禪師の佛面相承觀

山田 靈林

## 第十三章 道元の佛法

衛藤 卽應

等、となつてゐる。インド佛教の原型究明、中觀、瑜伽唯識、淨土教、密教の形態。次に中國佛教の特異な展開の様相。さらに日本佛教の圓熟せる諸教學の形態に至るまでを、概觀しつつしてゐる。

先の「大乘佛教の成立史的研究」とともに、歴史的佛教の諸形態を知らうとするもの、現下の日本佛教學界の水準を知らうとするもの、かつ又、佛教學により良き水先案内を求めようとするものにつての、好箇の書である。

昭三一、十一月刊、A5版、一三二〇頁、三省堂、二〇〇〇圓 (白土)

## 佛教とは何か

マララセーカラ著

近藤 徹 稱譯

マララセーカラ博士はセイロンにおける第一流の佛教學者であり同時にセイロン佛教界の大立者である。この書は博士が別別の機會に發表した三つの小論を含む。その中、最初のそして、主要な一篇「佛教とは何か」(原題は「是の如く我聞けり—佛教教義撮要」)は著者が一九四三年セイロンに駐留していた聯合軍軍人を主な對象となしたラジオ放送の内容である。テーラヴァーダ佛教の正統教義を、やゝ「宗學者」的口吻をまじえて手際よく語つてゐる。相手が主として歐米人であることを意識してであらう。殊更にキリスト教義を引合いに出して佛教を語つてゐる點は、面白くもあるし、またわれわれにとつて言わずもがなの感を起さしめる場合もある。

第三篇をなすのは第三十二回世界佛教徒會議議長としての博士の講演で、セイロン佛教界の指導者としてのマララセーカラ師の面目を示すものである。師は力

強い言葉で、現代世界における佛教の使命と佛教徒の團結の必要とを述べているが、その長い講演の半ば以上が、古く政府によつて保護され支持されていたセイロン佛教が前世紀において計畫的に奪われたその資産、その地位を回復することに現セイロン政府は力を致すべきだという訴えに費されているのは、セイロン佛教の現状について示唆するもの無しとしない。

アテネ新書B6版、一四〇頁、32年5月、東京弘文堂刊、一八〇圓（櫻部）

## 學會彙報

### ◇大谷學會

#### 春季公開講演會

時處 六月七日 午後一時 於本學講堂  
 歎異抄的生活 土岐 善麿  
 智慧と自由 河瀬 憲次

なお、河瀬教授の講演要旨は、改めて本號の巻頭論文として掲載されている。土岐講師の講演要旨も同様に本文として次號に掲載される豫定である。

### ◇眞宗學會

#### ○新入會員歡迎會

五月十五日午後三時 於會議室  
 なお、本年度委員を會終了後に選出

#### ○聞思會

六月十九日 午後三時 於會議室  
 今回は特に左の共同討議を行う  
 議題「原水爆實驗に對する佛教徒の態度」

出席者 名畑・稻葉・武生・藤原四教授以下十二名

○例會 七月三日午後三時 於會議室

## 研究發表

①曇鸞教學の重要性 山背 悟

②教行信證の構造について 稻葉教授  
 出席者 武生教授以下三十名

### ◇佛教學會

○例會 六月十九日 午後三時 於實驗室  
 五島行宣氏に依頼して、ビルマ・インドの佛蹟スライドを見學、終了後、舟橋教授、佐々木教悟教授、五島氏を中心に、インド、ビルマの佛教や佛蹟についての話題に賑つた。なお、映寫は學内の一般にも公開した。

參會者 教授、學生約五十名

### ◇哲學倫理學會

○例會 六月二十二日  
 「中間について」 西井 副手

出席者 世良・河瀬・立花教授、金松講師、阿部助教授、外に學生九名

### ◇教育學會

○新入生歡迎會 五月十三日  
 出席者 河瀬・前田教授、柴田助教授及び學生九名